

論文 「三つの一神教における宗教と紛争・・・平和への道筋はあるのか」
(全 10 回)

第 3 回、ユダヤ教の独自性とラビ・ユダヤ教の成立

塩尻和子（筑波大学名誉教授）

1、「世界最古の宗教」なのか？

「ユダヤ教」は、よく言われるような世界最古の宗教ではない。歴史的事実としては、古代イスラエルの宗教という長い年月を生き延びて変遷を繰り返し、紀元 200 年から 550 年ころにかけて今日の形になった宗教である。つまり、古代イスラエルの宗教と、現代のユダヤ教とは、同一の宗教とは言えない。実際に現在のユダヤ教が成立したのは、キリスト教よりも新しい。この事実は一般には理解されにくく、ユダヤ教をめぐる誤解の源にもなっている。それでも、ユダヤ教自体も、現代のユダヤ教は古代イスラエルの宗教を受け継いでいると主張する。その一例として、ユダヤ暦では紀元前 3760 年に天地が創造されたとして、今日でも天地創造紀元に西暦を加え、閏年で調整された暦が使われている。それによると、今年(2022 年)は 5782 年になる。

族長のアブラハムが、ヤハウェと名乗る神だけを崇拝するとして、神と契約を結んだ時期、紀元前 18 世紀ころには、すでに世界には多くの「宗教」が存在していた。たとえば石器時代の葬送儀礼にみられる死者を悼む行動は、確実に宗教であるということが出来る。モーセがヘブライの民をエジプトから救い出した時、紀元前 13 世紀前後にも、エジプトには壮大な古代の宗教儀礼が存在していたからである。

しかし、注意すべき点は、多くの解説書にみられるように、このような誤解は単純に否定してしまうこともできない、難しい側面も持っている。それは、ヘブライ語聖書に記載された物語がそのような古い時代にに基づいているに過ぎないとしても、聖書の物語は、古い時代の物語として、一蹴してしまうこともできないからである。『ユダヤ教』（ノーマン・ソロモン著、岩波書店、31 頁）ではヘブライ語聖書の最古の諸部分で「ユダヤ教のルーツ」とされる個所が「それくらい古いということに過ぎない」と説明している。

しかし、このような誤解は何に基づいているのか？東京大学名誉教授で我が国のユダヤ教研究の第一人者である市川裕先生は以下のように疑問を呈している。

「古代のユダヤ人たちは、バビロン捕囚後に、自分たちだけが救われるという選民思想を抱き、閉鎖的で自己中心的な宗教としてユダヤ教を誕生させた。その後、500 年を経過するなかで、排他的で形式的な律法中心主義となった。そのとき、ナザレのイエスが出現して、悔い改めと隣人愛を説き、世界宗教としてのキリスト教が誕生し、ユダヤ教は歴史の表舞台から消え去った……。こうした捉え方は、西欧のキリスト教中心主義に基づく世界史認識である。」（『ユダヤ人とユダヤ教』市川裕、岩波新書、10 頁）

このような誤解は西洋のキリスト教中心の歴史観によるものであり、私たちはここから

自由にならなければならないと、先生は強調されているが、残念なことに、このような誤解と偏見はユダヤ教だけでなくイスラームについて、今日でも強固に生きている。

ユダヤ教について一般的に考えられていることによれば、古代イスラエルの宗教の始まりが、数多くの神々の中からヤハウェと名乗る神が族長アブラハムと契約を結び、イスラエルの民を選民とする約束をしたことから始まり、神がモーセ、イザヤなどの預言者を通して人々に戒律を授けたことを信じる宗教であるとされる（創世記 12 章 1～3 節、創世記 35 章 12 節）。前回の第 3 回でも述べたが、この神の約束は、カナーン（現在のイスラエル・パレスチナ）の土地だけに向けられたものではなく、ユダヤ人が選ばれた民としてやがては世界を支配するという「予言」も含んでいる。これを「選民思想」という。ここに「神とユダヤ人」の特殊な関係と「神」の独自のかたちが出来上がった。

しかし、「神とユダヤ人」の特殊な関係とは、神はユダヤ人が神から与えられた律法に従うかぎり絶対的な神であるが、ユダヤ人が存在しなければ、あるいはユダヤ人たちが神の命令に背いたなら、神はもはや「神」ではなくなる。ユダヤ教において神の存在は、ユダヤの民が律法を遵守することによって初めて実現するのである。つまり、ユダヤ教の神は、限定された神であり、イスラエルの民にとってのみ唯一の絶対者であり、天地の創造主であり、歴史を支配する人格神なのである。そのために、ユダヤ教はイスラエルの「民族宗教」とも言われる。この「神とユダヤ人」の特殊な関係は、現在のユダヤ教においても変わることはない。この特質をよく表現するものとしては、もっとも重要な祈祷文によく表現されている。

「聞け、イスラエルよ、主はわれらの神、主はただ一人。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くしてあなたの神、主を愛しなさい。今日、私が命じるこれらの言葉を心に留め、子供たちに繰り返し教え、家に座しているときも、道を歩く時も、寝ているときも起きているときも、彼らにこれを語り聞かせなさい。さらにこれをするしとして自分の手に結び、覚えとして目と目の間に付け、あなたの家の戸口の柱にも門にも書き記しなさい。」（申命記 6：4）

今日でもユダヤ教徒はこの祈祷文を書いた紙を入れたお守り、メズーザーを、護符として家の全ての出入り口、部屋の入口などに打ち付けている。「聞け」（シェマア）という命令語の頭文字 ω が刻まれている。このような命令に従って、実際に日常的に用いられる祈祷文には「神よ、イスラエルにだけ平和を与えたまえ」といったものがみられる。しかし、今日では一部の改革派などで「イスラエルにだけ」を「すべての人々に」に替えて祈祷文とする事例も見られるようになってきた。

ユダヤ教の歴史を振り返ると、エルサレム一帯は、紀元前 63 年からローマ帝国の支配下にはいったが、ユダヤ人たちは何度もローマ帝国に対抗して反乱を起こし、そのたびに敗北を喫していた。132 年には、メシアとも見なされたバル・コクバの指揮の下で大きな反乱を起こしたが、135 年に敗退し、ユダヤ人はエルサレムから追放されるという悲劇が生まれた。この追放令によって、ユダヤ人の世界各地への離散（ディアスポラ）が始まり、彼らが再び

集合することができたのは、1948年にイスラエルが建国されて以降のことである。世界各地への離散によって、今日ではユダヤ教は民族の枠を超えて「ユダヤ教徒＝ユダヤ人」となり、民族的要素は失われることになった。

そこでユダヤ教では「誰がユダヤ教徒か」という問題が発生する。伝統的には「ユダヤ教徒の母親から生まれた子供はユダヤ人である」とされているが、今日では非ユダヤ教徒と結婚する男性も少なくなく、またジェンダー平等の観点から、特にアメリカ合衆国の改革派ユダヤ教団の中では、両親のどちらかがユダヤ教徒であれば、生まれた子供は正式の改宗儀礼を受けなくてもユダヤ教徒であると決議されている。

2、預言者とラビ

ユダヤ教が「世界最古の宗教」ではないとしても、ユダヤ教のルーツとして「ヘブライ語聖書」には今日のユダヤ教を性格づける特徴がみられるということは、否定できない。その特徴の中でも大きな要素を具体的に形成したのは、キリスト教の出現以前の「預言者」の活動と、キリスト教の成立後の困難な時代にユダヤ共同体を指導し、今日まで続くユダヤ教の規律を形成した「ラビ」の活動である。

ヘブライ語聖書形成期の各時代に生きた預言者たちは、それぞれ独自の活動によって聖書の思想を定着させていった。預言者とは、宗教的達人でも尊敬される人格者でもなく、ただ「神の命令を告知する手段」にすぎない。彼らはある日突然神の召命を受け、神の命令の道具、あるいは神の奴隷として働いた。いわば、神の命令によって、突然、自分の身に悲劇が降りかかったような状況であり、預言者の中には、この役目から逃れようとして遠方へ逃げたり自死を選ぼうとしたりする人物も出現するが、誰も神の召命から逃れることはできない。預言者は教団を形成したり、結社に所属したりはせず、ひたすら民族の倫理的指導を行い、民に対する神の罰を告げて威嚇し、幸福ではなく「禍」を告知する。そのために、民衆から嫌われ、捕らえられ、獄死する預言者も存在した。紀元前8世紀以降には聖書の「預言書」（ネビイーム）に名前を残していることから「記述預言者」と呼ばれる。

預言者は多くの場合、もっぱらヘブライ人・イスラエルに対する大きな危機が、神の審判として迫っていることを告げようとして、災いを告知したが、民衆からは嘲笑され迫害されたのである。そもそも、ヤハウエは幸福ではなく災害をもたらす神であり、神に従わないイスラエルの人々に「神の罰が下る」と警告することが預言者の役目であり、彼らは迫害され非業の死を遂げる例が多かった。新しい命令や救済、希望を告げる「福音」を与えるのは、預言者ではなくメシアの役割となる。

一方のラビは「わが師」の意味を持つ言葉であり、律法を専門的に学んで人々を指導する専門家に対する敬称でもあった。

ヤハウエの下では、「神の選民」としてユダヤ教徒はこの世で具体的に聖なる土地をあたえられると約束された。しかし「約束の地」は契約通りに一つの神を信仰してさえいれば、与えられるものではなく、自らその土地を獲得しなければならなかった。そのためにユダヤ教は政治と密接にかかわる宗教となり、政教一致の要素が加わることになる。特徴的なユダ

ヤ教の契約は「神と民族と土地」の三者が「イスラエル」という言葉によって結びついた独自のカタチをもったものとなった。つまりユダヤ教の目的は「イスラエルの神」に選ばれた「イスラエルの民」が約束された「イスラエルの土地」を手に入れ、そこに地上での祝福された王国を建設することとなる。ユダヤ教徒の歴史のなかで「神」も「民族」も約束の土地へ向かって収斂していくことになり、ここにおいて「土地」は現実的な目標となる。土地は人々が実際に生きる場であり、宗教的な神聖性と日常的な道徳が履行される場所として「まつりごと」の場でもある。ユダヤ教では、当初から政治と宗教が一体となって約束の土地を求め戦ってきたということができる。

どの宗教にも「独自の形」が存在するが、ユダヤ教徒はこの「土地を求める」という歴史の過程の中で全く新しい展開をなし続けてきた。彼らはヘブライ語聖書のルーツに基づきながら、世界中のどこにいても、独自の戒律のもとでまとまることができた。それが可能となったのは、律法学者「ラビ」の存在である。

ラビは2世紀ころから律法の専門家、ユダヤ教の教師として登場した。当初、彼らは他の専門職を生業としながら律法の研究に携わった。イスラームの法学者ウラマーが、法学者としては報酬を得ることがないという形態は、ユダヤ教から受け継いだ慣習かもしれない。現在ではラビは、一般的には律法の専門家として、ユダヤ学院やラビ養成の専門学校などの教師として、また説教者、冠婚葬祭の執行者、カウンセラーなどとして働く。ユダヤ教では一般にラビは聖職者でもなく出家をすることもなく、妻帯して普通の生活を行うが、この点もイスラームのウラマーの立場と似ている。

今日、ユダヤ教は、聖書をルーツとしながら2世紀から発展してきたラビによる指導に従って展開してきており、ユダヤ教は「ラビ的ユダヤ教」と呼ばれるようになり、「ラビ的ユダヤ教」こそが今日のユダヤ教の基盤となっていることを忘れてはならない。しかも、このラビ的ユダヤ教は、イスラーム支配下、アッバース朝下のバグダードで発展したものである。

3、律法とユダヤ学院の役割

ユダヤ教の聖書（ヘブライ語聖書）は、紀元前1000年から前167年までに書かれたとされるが、実際には、2世紀後半までに固有の聖典として決定された。今日の律法の源は紀元後200年以降のラビの活躍によるもので、つまり、今日のユダヤ教の聖典（聖書と律法）はキリスト教よりも後の時代にまとめられたのである。したがって「ユダヤ教は世界最古の宗教である」ということは正しくないことになる。

ユダヤ教ではモーセの五書をもとにして、祭儀、法律、倫理の全般にわたって613もの細則をもった律法が定められている。律法は祭司が口頭で与えた規律、口伝律法からはじまり、やがて膨大な「タルムード」として集大成され、律法学者ラビによって細則が決められていった。この細則規定（ミツバー）はユダヤ教寺院シナゴグにおける儀礼的规定だけではなく、公的私的を問わず日常生活の隅々まで行き渡る規則である。

タルムードとは、ヘブライ語で教訓、教義の意で、紀元前2世紀から5世紀までのユダヤ教ラビたちがおもにモーセの律法を中心に行なった口伝律法「ミシュナ」と、これに対

する注釈「ゲマラ」を集大成したもので、ユダヤ人にとっては「モーセ五書」（トーラー）に次ぐ権威をもつものとされる。タルムードは生活上のあらゆる問題を網羅して論じているので、祖国を離れたユダヤ人はつねにこれを生活のよりどころとしてきた。ユダヤ教徒が世界中、どこに住んでも、ほぼ同一の規範に従って暮らすことができたのは、このタルムードの存在とラビの指導によるものである。

口伝律法ミシュナはパレスチナとバビロニア（イラク）の両地で律法研究の基本資料となり、やがて膨大な注釈（ゲマラ）がつけられた。前にも述べたが、これが編纂されて、パレスチナ・タルムード（400年ころ）とバビロニア・タルムード（550年ころ）としてまとめられた。両者は同一のミシュナを資料として編纂されたが、パレスチナとバビロニアの社会的、経済的、そして文化的差異が反映している。とくにバビロニアのユダヤ人コミュニティは安定した境遇を得ることができ経済的に恵まれたうえに、優れたユダヤ学院の存在によって、他のコミュニティに比べて文化的学問的に卓越していたため、彼らの生み出した全20巻以上ものバビロニア・タルムードは、今日に至るまで生活、信仰の基礎としてユダヤ人全体に大きな権威と影響力をもつことになった。

パレスチナ・タルムードは400年当時のパレスチナ一帯の政治情勢によって、編纂途中となり、今日では消失した部分もある。したがって「タルムード」といえば、20巻余の全巻が残っているバビロニア・タルムードを指すことが多い。なお、ミシュナにはヘブライ語、ゲマラには当時の話し言葉アラム語が用いられている。

これらのタルムードを活用してラビ的ユダヤ教を発展させた背景には、アッバース朝のイスラーム政権の支配下で、大きな活躍をしたユダヤ学院イエシヴァの存在がある。ユダヤ学院イエシヴァはアッバース朝期のバグダードおよびその周辺地域に居住したユダヤ教徒の精神的支柱となっていた。当時、いくつかのユダヤ学院の存在が認められているが、大きな成果を上げたのは二つの学院で、スーラ・アカデミーはヒッラに近いユーフラテス河畔にあった。もうひとつはブンベディーサ・アカデミーと呼ばれ、チグリス川とユーフラテス川をつなぐ運河の北側に存在した。

ユダヤ学院は学問所であるばかりでなく、ユダヤ教徒にとっては絶対的な権威を誇る裁判所でもあり、律法や宗教的判断の拠り所として「本山的」な役割を果たしており、イスラームのマドラサ（高等宗教学校）のモデルともなった。イエシヴァもマドラサと同様に、カリキュラムは法学と神学が最重要視され、世界中のユダヤ教徒の精神的かつ文化的規範のモデルを提供した。

興味深いことに、イエシヴァの運営経費として、アッバース朝から地方税の一部が支払われており、残りはユダヤ教徒の献金から賄われていたが、イスラーム政府はこうして「保護民」（啓典の民）の教育機関を文字通り保護していたのである。

スーラ・アカデミーとブンベディーサ・アカデミーとはたがいに競合しあっていたが、双方のライバル意識は学院長、ガーオンの人事や教官たちの地位の問題だけではなく、口伝律法の解釈や律法の実施に関する「ラビ解答書」（レスポンサ）をめぐる争われた。たとえば、スーラ・アカデミーはパレスチナ・タルムードの権威を認めていたが、ブンベディー

サ・アカデミーはそれを否定していた。ときにはユダヤ共同体がこれらの二つの学院に同時に同じ質問書を寄せるという事態が起こり、学院長を怒らせることになる。遠い外国に居住するユダヤ教徒がバビロニアの権威を求めて同時に二学院に質問状を送ることが発生すると、事態は極めて深刻なものとなったと伝えられている。

「ラビ解答書」は寄せられた質問に学院が答える形式で発布されるが、ユダヤ社会にタルムードの重要性を確認させ、タルムードの指示に則って日常生活を送るための基盤的要素となるものであった。学院間の見解が競合する事態がしばしば起こったものの、タルムードの知識はバビロニアの二学院の努力によって、やがてユダヤ教徒の生活指針として定着していった。したがって、学院長ガーオンの権威は絶大であり、彼の指示に違反することは、神の命令への違反と同一視されていたほどである。

4、イスラーム治下のユダヤ教

イスラーム支配下の地域には、もともと多種多様な民族集団が棲息していた。はじめから多元共存の社会であり、異種混交性をもった共同体が形成されていた。イスラーム教徒ムスリムとユダヤ教徒との関係は、イスラームとその他の宗教との関わりのひとつとしてみられており、ヨーロッパのキリスト教社会で発生したユダヤ教徒だけが特別に差別・迫害されていたという状況ではなかった。イスラーム支配下では、キリスト教徒に対する規制のほうがかたかったと伝えられる。初期イスラーム支配下のキリスト教徒は、人口的にも多数派であり、また背後に強力なビザンツ帝国が控えており、イスラームという新しい宗教に対抗して自己の宗教を擁護するだけの勢力を保っていた。そのために他国の進撃を助けるスパイとして疑われることもあったようである。したがって、ズィンミー（保護民）規定の厳格な対象とされるのは、まずキリスト教徒であり、弱小集団であるユダヤ教徒に対するムスリムの対抗意識や反感は低かったということができよう。

武器を携行することが許されなかったユダヤ教徒は、兵士として働くことはできなかったが、商人、手工業者として活躍し、中には農業に従事する者、官僚として政府機関に奉職する者さえ現れていた。ムワッヒド朝（1130～1269、北アフリカとイベリア半島の一部を支配したイスラーム王朝）によって生地コルドヴァから追われたユダヤ教徒思想家のマイモニデス（1135～1204）も、エジプトのファーティマ朝（909～1171、シーア派のイスラーム王朝）の宮廷に医師という要職を得ている。イスラーム支配下のユダヤ教徒は、建前上の規制とは裏腹に、ほとんどの場合、生業を金貸し業に制限されることもなく自由な活動ができたのである。

イスラーム側でも、9世紀以降はイスラーム王朝に住む一般庶民のムスリムも、一握りの為政者に支配される存在となり、ユダヤ教徒やキリスト教徒に課されるジズヤ（人頭税）の支払いを除けば、実質的にズィンミーと同様の抑圧された立場にあった。したがって、イスラーム政権下では、保護民ズィンミーだけが差別され二級市民的な待遇を受けていたわけではないようである。

前述の市川裕先生は、イスラーム支配下のユダヤ人の境遇について以下のように述べて

いる。

イスラームが世界を席卷した8世紀当時、世界のユダヤ人人口の9割がイスラーム圏内に生活したと言われ、イスラームの支配は、ユダヤ人にとって祝福となったと考えられる。イスラーム出現直前の時代には、ビザンツ帝国とササン朝が宗教的理由からユダヤ人を圧迫したとされる。これに対して、イスラーム共同体は、その領域内のキリスト教徒やユダヤ教徒たちを「経典の民」「庇護民」として遇し、各宗教共同体に法的自治を与え、その存在を法的に認知した。ウマイヤ朝カリフのウマルが定めたこの決定は、近代にいたるまでイスラーム支配地域で効力を持った。(『ユダヤ教の歴史』山川出版、2009年、61-63頁) (ここで「ウマイヤ朝カリフのウマル」とされているのは、「第2代カリフのウマル」とするのが正しい。正統カリフ時代の出来事である。)

市川先生はさらに『ユダヤ教とユダヤ人』(15-26頁)のなかでも、イスラームの拡大とともに、ユダヤの人々も地中海域へ進出し、ユダヤ人は大いに経済的繁栄を享受したことを述べて、中世の一神教世界に対する公正な見方と、東西の宗教文化の違いへの認識が必要であると厳しくいさめていて、「流浪と迫害」とか「貧しく賤しい金貸し」は、西洋キリスト教世界でのユダヤ人に対する偏ったイメージである、と批判している。

紀元70年のユダヤ戦争後から、ローマ帝国によって追放され、祖国を持たない離散の民となったユダヤ人は、実際に商業と金融の分野に進出した。それは、当時、キリスト教社会では金(カネ)を扱う仕事を卑しい生業として忌み嫌っていたことと、土・農地を神聖なものと考え、ユダヤ教徒には農耕を禁じたという理由もあって、ユダヤ人は金融業と商業活動に活路を見出していたのである。

7世紀からイスラーム世界が拡大したこともユダヤ人の商業活動に有利に働いた。イスラーム帝国下では、ユダヤ人が比較的自由に移動できたからである。今日でも金融業にユダヤ系が多いのは、祖国を持たなかったユダヤ人が世界を駆けまわって商売をする際に、物資を扱うより金銭を扱うほうが便利だったことにもよる。世界の大手企業、特に金融業・大銀行などは、今日でもユダヤ系資本が多いのはこのためである。

資料

右はメズーザーの一例。左は、筆者がアメリカ、ボストンで借りて住んだユダヤ人の家のメズーザー。玄関だけでなく家の中の出入り口すべてに打ち付けてあった。

(左の写真は著者撮影、右の写真は英語版 Wikipedia から)



シナイ半島、セント・カタリナ修道院の庭にあるモーセにちなむ遺跡のレプリカ（右はミデアン人の井戸、奥に水をくみ上げるポンプが設置されている。左は「燃える柴」とされる。
（著者撮影）

